

さっぽろラウンドウォークの目指すもの

エコ・ネットワーク

<歩くことを楽しむ道>

私がフットパスに目覚めたのは、イングランド北西部の湖水地方に行ったとき、見事に風景とマッチしたフットパスに出会ってからである。1990年代の初めのこと。北海道にこそ、こんな歩く道が似合うのではないかと直感した。

まず、歩く活動を盛り上げなくてはならない。その思いが1993年から始まった道新文化センターの野外講座「エコ・ウォーキング」の開設につながった。30年後の今日も続いている長寿イベント（現在フットパスウォーキング）で、参加者延べ人数は優に10万人を超している。歩くのを楽しむ層の底上げが果たせたのではないかと思う。

ではそもそもフットパスとは何なのか。100年どころか200年近い歴史をもつ英国の真似をしようにもそれは不可能というもの。結局、北海道の実情に即したフットパスを構築しないといけないという結論にたどり着く。

同じ歩く道であるハイキングコースと比較するとわかりやすい。ハイキングコースにはたいてい目的とするものがあるはずだ。神社仏閣でもよい。滝や溪谷かも知れない。対するフットパスにはそのような目指すものがなくても構わない。言い切ってしまうと、「歩

くことを楽しむ」道だからである。路傍^{ほう}の草花や石仏を見つけて興味深くながめたり、地元の人々とのさり気ないコミュニケーションをとることでよい。自発的な発見、出会いを楽しむことのできる道、それがフットパスである。

<長距離化、周回化を見据えて>

今世紀に入り、道内でフットパスを作って実際に歩く活動を始めた所は多い。しかしながら、今日までの流れを見ていると、町内市内に1本または数本のコースを作っただけという地域が大部分である。「作る」とはいえ新たに道を開くのではなく、既存の林道、農道、遊歩道などをつなぐ場合がほとんどである。これだけだと、一般の人たちにはハイキングコースと同じに見えるのも無理はない。「歩くことを楽しむ道」という基本が置き去りにされていると感じるケースが多い。

こういった状況を打破するひとつの方法として、フットパスの長距離化と周回化にたどり着いた。長距離化は文字通り距離の長いフットパスにしていくこと。短くても数十km、できれば100kmを越えると尚よい。それには町内市内に留まっていたコースを町界を越えてつないでいければよいのだが、当然両地域ではフットパスに対する温度差があったりして簡単には



英国のヨークシャー地方のフットパスと道標



丘陵も楽しく歩けるさっぽろラウンドウォーク

進まない。その点、ロングトレイルは名前の通り、多くは100km以上あるので、ルートに対する考え方、作り方が参考になる。

周回化は文字通り、ある都市なり地域をぐるりと取り囲む形のコース設定になる。このような発想で札幌の外周を一周するコースを作ろうと考え、エコ・ネットワークでは20年以上前から市民参加のイベントを兼ねてコース候補地を歩いてきた。「札幌にもフットパスを！」という共通テーマのフォーラムを10年前から続けてきた。

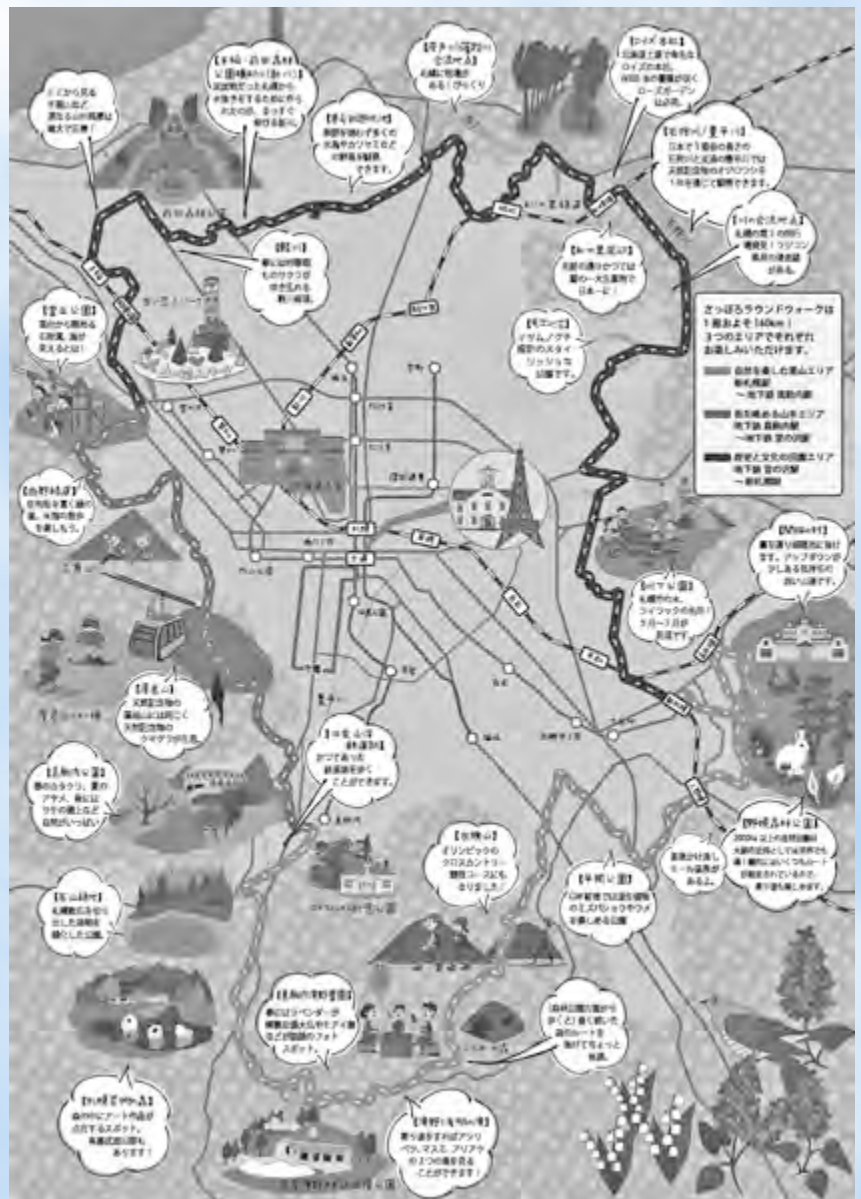
2019年以降、北大、札幌市、観光協会等にエコ・ネットワークも加わりコースの選定を進める中で構想されたのが、総延長140kmの「さっぽろラウンドウォーク」である。数年以内の「開通」を前に先進地である京都一周トレイル(83km)と広島湾岸トレイル(約400km)の事例を話してもらう目的から2021年3月20日オンライン形式で開催したのがフォーラム「健康と観光の両面に寄与するラウンドウォーク」である。

フットパスを健康面で役立ててもらうには、散歩など地元の住民による日々の利用が欠かせない。観光面という札幌を訪れる人達に従来の観光とはひと味違った体験を楽しんでもらいたいという意図が込められている。また140kmもあれば1回では回り切れないのだから、市内での宿泊数が増える効果も期待できるという訳だ。

札幌の取組みが先行事例となって道内各地に波及すれば願ってもないことと考えている。



藻岩山から札幌市内を望むさっぽろラウンドウォーク



さっぽろラウンドウォークルート予定地

URL : <https://www.sapporo-rw.com/>